

# Eureka VI

六年制通信 No. 5 平成30年5月12日(土)号

## 知覧のこと

小説の冒頭には作家の工夫が見えるものですが、「吾輩は猫である。名前はまだない」なんて、うまいものです。漱石は非常に教養のある人ですから『草枕』の「山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」などはすでに古典の風格がありますね。漱石の作品を本当に理解するには、こちらにも相当の知識が必要なので、なかなか楽しく読めないかもしれませんが、わからなくてもいいから、皆さんも読んで下さい。

「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」はご存じ『坊っちゃん』ですが、昨日読み返していて、この冒頭に続く箇所に「ああ、時代は変わったなあ」とため息が出ましたね。このあと、坊っちゃんが校舎の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした話が出ていますが、その原因が友だちからいくら威張っていても二階からは飛べないだろ、弱虫やいと言われたから。そして、背負われて帰ってみると、父親から二階から飛び降りたくらいで腰を抜かすやつがあるかと叱られたこと。すると坊っちゃんは、次はちゃんと飛んで見せますと答えたという話が続きます。現代なら、大騒ぎになるでしょうね。昔は当たり前だったこういう立派な父親、今でもいるのかなあ。いたら会ってみたいなあ。その前に坊っちゃんみたいなお子もいないか。

そう言えばもう一つ感心したシーンがあります。バツタ事件の処分についての職員会議で山嵐が語った言葉です、引用してみます。

「私は教頭および其他諸君の御説には全然不同意であります。と云うものは此事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新来の教師某氏を軽侮して之を翻弄し様とした所為しよゐとより外には認められぬのであります。(中略) 教育の精神は単に学問を授ける許ばか

りではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹こすいすると同時に、野卑な、軽躁な、

暴慢な悪風を掃蕩そうとうするにあると思ひます。(中略) かゝる弊風を杜絶とぎする為めにこそ

吾々は此の校に職を奉じて居るので、…」(岩波書店 漱石全集第二巻 p.318)

もちろん、私の感心したのは山嵐、つまり堀田先生の語彙です。これ、書いたのではなく発言ですから、みんな聞いて理解できたわけですよね。ああ、こういうレベルの言葉も、坊っちゃんの父親とともに私たちは失ってしまったのですね。本当に、私たちは知らないうちに、大切なものをたくさん失っていますね。きっと。

そんなことを考えてため息をついていたら、知覧の、あの死んでいった若者たちの遺書を思い出したわけです。高2の諸君は修学旅行で記念館を訪れますね。

知覧は第二次大戦の最終盤に特攻機が飛び立った地として有名なのですが、記念館が現在のように整備完成したのは、昭和60年から工事がスタートして2年後のことです。もとは知覧特攻遺品館と呼んでいました。今では特攻隊員たちが最後の夜を過ごす三角兵舎も再現され、館内には写真や遺書、遺品、零戦や飛燕も展示されています。

特攻機が飛び立った地は他にもあるのですが、知覧を有名にしたのは地元で富屋食堂（これも復元されています）を営んでいた鳥濱トメさんの存在でしょう。特攻兵たちから母のように慕われたというトメさんは戦後も生き、死んでいった若者のことをさまざまに語っています。虫になって戻ってきた宮川軍曹のエピソードが一番有名ですが、知っていますか。70余年前、君たちとほとんど年の変わらない若者がたくさん死んでいきました。もっともっと生きたかっただろうに、自分で操縦桿を握って死んでいきました。時代といえはそれまでですが、そういう歴史を君たちに知ってほしいと思います。

記念館では、彼らの写真を見てほしい。遺書を読んでほしい。みんな本当に、今ではほとんど死語ではないかという気すらしますが、凜々しい顔をしています。凜々しい顔ってどんな顔かわかりますか。若々しく、口元を引き締めて写っている写真を見ると、恋人のいた人もいたろうに、妻や幼子のいた人もいたろうにと、胸が詰まります。この人たちがみんな死んでしまったということに圧倒されて、何も話せなくなってしまいます。遺書は、君たちには読めないかもしれません。墨書きや万年筆で書いたものが多いのですが、どれも美しい字で父母への感謝が綴られています。旧字体で書かれているものもあり、漫画のような字に慣れている世代には読めないのではないかと思います。日本語自体もしっかりしています。あんな手紙の書ける教養を今の若者は持っているのだろうか。若者だけでなく、もちろん私も持っていないのですが、死んでいった人たちと、残された人々、後の世代の私たちと、時が流れるにつれ、暮らしては豊かになりましたが失われてきたものも多いように思います。

特攻に対する後の世の評価について言うつもりはないのです。たった70年というのか、70年も昔というのか、現実に存在した彼らの残したものに触れて、考えてほしいと思うのです。耳を澄ませば彼らの声が聞こえるかもしれません。「残された者がもっとしっかりしろよ」と言ってくれるかもしれません。猫背で、立っていてもぐらぐらと動いている若者には「しゃんとせい」と叱ってくれるかもしれません。薄ら笑いでへらへら顔の、それでいて最近はやりの過剰な自己愛を持ち、何もかも他人のせいにしたがる若者たちには、一体なんと声をかけてくれるのでしょうか。いやひよっとしたら、あきれてしまって何も言ってくれないかもしれないですね。こんなこと書いている私ももちろん戦争を知りません。若い時はへらへらとしていました。一番最初に写真の若者に叱られるのは私自身でしょう。ですから自戒を込めて言っているのです。

君たちが知覧の研修を経て自分の気持ちの中に感じるものがあつたなら、それを教えてほしいと思います。また、家に帰って家庭でも話してほしいと思います。